

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2012 年 1 月 10 日

派遣者氏名（専門分野）	金岡 直子 （ 西洋美術史 ）
-------------	-----------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	ギュスターヴ・モローの晩年の制作活動をめぐって—同時代の受容—
-------	---------------------------------

派遣期間

2011 年 11 月 2 日 ～ 2011 年 11 月 17 日

訪問 研究 機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	フランス	パリ	フランス国立図書館	なし
	フランス	パリ	オルセー美術館資料室	なし

派遣先で実施した研究内容

19 世紀フランスの画家ギュスターヴ・モロー（1826-1898）の晩年の制作活動をめぐる研究の一環として、モローの友人で愛好家でもあったロベール・ド・モンテスキュー伯爵（1855-1921）によって 1906 年に開催されたモロー回顧展についての調査を行い、関連する情報を収集した。閲覧した資料は、以下の 3 種類に大別される。

1. モンテスキューによる回顧展カタログおよび講演について

フランス国立図書館フランソワ・ミッテラン館において、モンテスキュー伯が序文を寄せた 1906 年の回顧展カタログ(*Exposition Gustave Moreau, Paris : Galerie Georges Petit, 1906.*)、および展覧会期間中にモンテスキューが行った講演の内容を収めた『いとも麗しき殿下たち』(MONTESQUIOU, Robert de, *Altesses Sérénissimes*, Paris, 1907.) を閲覧した。

2. 回顧展の受容について

上記の資料の閲覧ののち、同時代の人々がモンテスキューの講演に対してどのような感想を持ったかについての調査を行った。まず、フランス国立図書館リシュリユー館において、これら展覧会と講演に関するモンテスキュー宛ての書簡を閲覧した。なお、手稿類の判読に際しては、モンテスキューの詳細な研究書である『モンテスキューの美学』(BERTRAND Antoine, *Les curiosités esthétiques de Robert de Montesquiou*, 2 vol., Geneve: Librairie Droz, 1996.) を参考にした。また、1906 年当時の展覧会評、講演評の収集も行い、『ル・ゴロワ』や『ラ・プレス』、『ジル・ブラス』などの紙面から該当記事を抽出した。

3. ルイ・メナールについて

モンテスキューの講演において、派遣者がかねてよりモローの作品への影響を示唆してきたギリシャ学者ルイ・メナール（1822-1901）が取り上げられていたことから、同時代のメナール受容についても調査する必要性を感じ、これまで国内で入手することのできなかったメナールについての回想録『ルイ・メナールの墓』(CHAMPION, Édouard, *Le tombeau de Louis Ménard*, Paris : Honoré Champion, 1902.) を閲覧した。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

これまでの研究において派遣者は、19 世紀末に流行を見せた諸神混淆思想とモローの作品との関係に関心を抱き、研究を進めてきた。彼の晩年の作品はひとつの神話や宗教の枠組みでとらえきれない難解なものが多く、解釈を行うためには、制作の背景にある画家の思想や同時代の受容の状況などについての包括的な研究を行うことが必要である。今回の調査でモンテスキュー伯爵に焦点を当てたのは、彼がモローと親しかったことを自負する愛好家であり、かつ当時の宗教情勢や神秘思想にも造詣のあった知識人であったことから、解釈の難しいモローの晩年の作品を最もよく読み解くことのできた人物のひとりであると考えられたためである。

まず、フランス国立図書館での調査では、彼が序文を手がけた 1906 年の回顧展カタログや、会期中に行われたモローについての講演の内容を収めた著書を閲覧することにより、伯爵がモローの作品をどのように受容し、どのようなモロー観を観者に提示しようとしていたのかが明らかとなった。彼は「神々の隠れ家 *Refuge des dieux*」というキーワードを提示し、モローの作品を、19 世紀末にかつてのような影響力を失った様々な神々や聖人、英雄たちが逃げ込む一種の聖域に例えている。このことは、複雑で難解ともいえる諸神混淆主義をモロー芸術の根幹をなす特徴として積極的に評価しようとする傾向が、同時代においても存在していたことを示すものである。

さらに興味深かったのは、モンテスキューの講演において、派遣者がこれまでも注目してきた哲学者ルイ・メナールとモローの作品との類似性が指摘されていたという点である。メナールは諸神混淆的な思想で知られる哲学者にしてギリシャ学者、詩人であり、19 世紀の文筆家たちに影響力を有していた。モンテスキューはモローとメナールの間に直接的な交流があったかどうかについては否定的な見解を述べているものの、メナールの文章やモローの言葉を適宜引用しながら講演を組み立てており、彼らの作品が多様な神を内包していること、そしてそれらの根底にキリスト教を重視する芸術観があることを的確にとらえている。この講演は、二人の芸術家を諸神混淆というキーワードで結び付け、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて世界の様々な宗教の総合化が見直される気運があったことを示している点で重要な資料である。今後の研究では、モンテスキュー自身の宗教観や芸術観についてもより詳しく吟味し、当時の宗教情勢が諸芸術に及ぼし得た影響について考察を深めていきたい。

一方、モローに関する論文やオークション記録などを保存しているオルセー美術館資料室には 1906 年の回顧展および講演に関する資料はほとんど収集されておらず、期待したような成果は得られなかった。しかしながらこのことは、モロー美術館関係者およびモロー研究者の間では同展覧会があまり注目されてこなかったという事実を浮き彫りにしている。その理由のひとつとしては、同展覧会がモンテスキューという一愛好家によって開催されたものであり、モローの作品の大半を収めたフランス国立ギユスターヴ・モロー美術館のイニシアチブによるものではなかったということが挙げられよう。これまでの調査では、回顧展開催に際してモンテスキューがモロー美術館と何らかのやりとりをしたという記録は見出されなかった。今後調査を進め、この展覧会および講演に対してモロー美術館側がどのような態度を示していたのかについて考察する必要がある。

派遣後の研究発表の予定

2011 年 12 月 13 日に、大阪大学大学院文学研究科西洋美術史研究室ゼミにおいて口頭発表を行った。また、同テーマについてさらなる調査を行い、その成果を学内の紀要あるいは学外の雑誌に順次寄稿する（未定）。